

9 初代曲直瀬道三とらい遺伝説に

ついて

横田 則子

従来の研究史の中では、らいは日本中世社会において
仏罰、近世江戸時代以降は遺伝病と認識されたと位置付
けられてきた。また近代の隔離政策以降の激しい差別の
実態の記憶から江戸時代のらい患者のあり方が類推され
ることが多い。しかしこのように江戸時代から戦前まで
のらいをめぐる状況をほぼ同様のものとして捉えるのは、
近世のらいに関する実証的な研究が殆どされてこなかっ
たことにもゆえんするといえよう。本報告は、近世医学
がらいをどのように捉えていたかを考察することによつ
て、らいをめぐる社会的状況の近世的段階の特質を明ら
かにしようとする研究の一階段である。

ここでは近世医学の初期の代表的人物として、日本医
学中興の祖、初代曲直瀬道三（一五〇七〜一五九四）をと
りあげる。道三は中世の主流であった仏教医学ではなく

李朱医学を学び、彼の門下によって近世前期の医学の主
流が形成されたことはよく知られるところである。道三
の著書の内、らいについて詳しく論じているものに、『授
蒙聖功方』（一五四五年）と、『啓迪集』（一五七四年）とが
ある。後者は中国の諸医書を出典を明記しながら抜粋し
たもので、つとに著名である。これに対し前者はもとも
と「近国親問の学者の為」に書かれたもので、中国医書
を平易な語句に直して引用し、また道三のオリジナリティ
と思われる記述も見られる。それゆえに『授蒙聖功方』は
まだ三九歳の時の著書であるが、彼のらい治療の基本が
『啓迪集』よりも、よく出ている本といえよう。両書の
詳しい史料の解釈は別稿で論ずるので、本報告では遺伝
説に絞って論じたい。

らいの遺伝説は中国医書の中ではしばしば見られ、道
三が田代三喜から学んだという『玉機微義』（二三九六）
にも「伝染」という言葉で登場する。しかしながら『授
蒙聖功方』においては、病因を論じている箇所でも遺伝
説には全く触れられていない。この書のらいの記述の多
くが中国医書、特に『玉機微義』に負うにもかかわらず、

触れていないということは、道三が意識的に遺伝説をとらなかつたことを想定させる。一方『啓迪集』も「癩風宜禁」すなわち療養上の禁止事項（例えば肉食や房事の禁止）の内に、『丹溪心法』（一四八一）にある、多くの人が小康を得ると禁忌を犯し再発すると述べたくだりを引用したのと関連して、『玉機微義』の「不仁極狠之業、雖有悔言而無悔心、良得其情、然亦有伝染者」を記しているに過ぎない。これは本来『玉機微義』では「論癩風所因」すなわち病因論に記述されているもので、道三が積極的に遺伝説をとるならば、『啓迪集』でも「癩風本源」の箇所でも論ずべきことであろう。

道三はなぜ遺伝説をとることに消極的だったのか。道三と同時代に活躍したイエズス会の宣教師達は救癩活動によつて多くの信者を獲得し、道三自身洗礼を受け、多くの弟子たちと共に病人の治療にあたった。また起請文の文言に於いては、もし約束を反故にした場合、神罰・仏罰によつて現世で白癩・黒癩になることを記す習慣も中世以来いまだ存続した。これらの事実は当時らい患者が巷に溢れ、らいの恐怖が誰にも身近であつたことを示

している。らいが社会的貧困によつて発病しやすくなる病気であることは現在の医学の証明するところであり、当時の不安定な社会状況が大量のらい患者をつくりだしていたと想定される。江戸時代も時代を下ると遺伝説をとる医書が多く見られるようになるが、道三の時代にはまだ、らいは特定の「家」に付随する病ではなく、誰もがかりうる病として認識されざるをえない状況があつたのだらう。道三の遺伝説に対する態度も、このような日本の現状、自己の臨床経験に基づいて、彼が中国医学をそのまま導入するのではなく、主体的・自主的な態度で臨んだ結果といえよう。

起請文に白癩・黒癩の文言が見られなくなるのは一六四〇年代である。これは戦乱が終結し、生産力も向上して人々の暮らしが安定する時期と一致する。おそらくらい患者そのものが減少し、らいの恐怖が実生活から遠くなつていったことの結果であらう。そしてこのような状況は同時に、らいを特定の者の病とみなし、患者の発生が家ぐるみの差別に結びつく、いわば新たな近世的らい病観の時代の到来を示すものでもあつた。（兵庫県西宮市）